想像界の生物相

半人半魚の女神たち

民博 学術資源研究開発センター　山中 由里子（やまなか ゆりこ）

H0068139

H0227851

H0237049

資料名	豊漁祈願舞踊用仮面（人魚）
標本番号	H0068139
地域	メキシコ
サイズ	高さ 8.5 ×幅 20 ×奥行 30

資料名	石彫像（セドナ）
標本番号	H0227851
地域	カナダ
サイズ	高さ 39 ×幅 73 ×奥行 29

資料名	絵画「セイレーンと蛇」
標本番号	H0237049
地域	コンゴ
サイズ	縦 47 ×横 102 ×厚さ 2.6

※サイズの単位はセンチメートルです

◆◆◆ 人間が創る不可思議な生物 ◆◆◆

我々が属する現生人類ホモ・サピエンス・サピエンスは、心の眼で見た心的な像を、眼に見える、手で触れることができる物質で描き出すという力を進化の過程で身につけた。この能力を駆使してヒトは、半人半獣の「ライオンマン」からゴジラまで、さまざまな怪物や幻獣を想像してきた。これら想像界の生物たちは、人間が自らをとりまく世界を理解し、身に危険をおよぼす脅威や眼に見えない世界の力に対する恐れや畏敬の念を対象化し、ときに操ろうとする行為と深く結びついてきたものであった。

このコーナーでは、民博の所蔵資料の紹介をとおして、世界のさまざまな地域の人びとが、不可思議な生き物、あるいは人知を超越する存在をどのように思い描いてきたのかをみてゆく。特に、実在の生物を合成したり、擬人化したり、歪形（わいけい）化した表象が生み出されるプロセスと、その背景にある自然認識や宗教観、さらに生態系と人間の営みの相関関係について考えてみたい。第一回目にとりあげるのは人魚。特に、水にかかわる土着の信仰が、ヨーロッパから入ってきた人魚イメージと出会って創造されたモノを紹介しよう。

◆◆◆ 水の精と人魚像 ◆◆◆

まずはメキシコ、ゲレロ州バルサス河付近のナワの人びとが豊漁を願う芸能の際に使ったとされる銅製打ち出し細工の仮面である。笑っている女性の顔が水の流れのように波打つ髪の中心にあり、その周りを反時計回りに魚の尾がとり巻いている。メキシコのインディオ文化の研究者でありコレクターであった故ドナルド・コードリーの収集品の一部であった貴重な資料である。魚を支配するワニや精霊をなだめて漁をするという筋書きの魚のダンスで使われたとされる。スペイン人がアメリカ大陸に来る前から人魚の表象があったという証拠は今のところないそうだが、グアテマラのマヤ系先住民族のなかには水の女神が半人半魚の人魚であると信じる人びともいるとする研究もある。

同じアメリカ大陸の極北圏に住むイヌイットのアーティストたちは、古くから語られてきた神話や伝承を、二〇世紀半ばごろから版画や彫刻の媒体で表現するようになった。彼らはセドナ（タレーラユなど、地域によって呼び名は異なる）という、アザラシやセイウチなど海棲（かいせい）哺乳類を支配する女神を人魚の姿で描く。デイビッド・ルーベン・ペックトウクンによるソープストーンの石彫作品では、人間の頭に魚の尾、さらにアザラシのひれの要素が組み合わさっている。イヌイットのあいだでは動物や人間に宿る霊魂は同じものであり、人間が動物に変身でき、その逆も起こると考えられている。変身の概念は古くから伝わるものであるが、人魚の姿で水の神を描くというのは、やはりヨーロッパのマーメイド像の影響なのであろう。

最後に、コンゴのアーティスト、ウィンジが描いたかなり色っぽい人魚には蛇が巻きつき、なぜか腕時計、ネックレスをして電話でお話をしている。西・中央アフリカ、カリブ海域で信仰される「マミ・ワタ」（マミ・ウォーター）（「水の母」が土着化したことば）とよばれる水の精がこのように描かれることが多い。マミ・ワタの祭壇に捧げられる種々の消費財が絵に描き込まれ、蛇はマミ・ワタの予知能力を象徴するという。時計、ネックレス、電話はマミ・ワタを喜ばせるアイテムなのだろう。西洋的な人魚像がベースになっているが、信仰形態は混交的なものである。マミ・ワタ信仰が、人魚に見間違われてきた海棲哺乳類のマナティーの棲息（せいそく）地と重なるという説もあり、興味深い。